新 刊 Book reviews

□松井 洋（編集），高橋英樹（監修）：**北海道維管束植物目録** A4. 280 pp. 2015年3月14日発行．自費出版．￥3,704＋税，送料別．ISBN no number.

著者が北海道に自生するとみなした維管束植物2404分類群（1875種32亜種212変種239品種46雑種）および帰化種（国内移入種も含む）676分類群，さらに道のブルーリストに掲載されているものを中心に195種の植栽種を網羅し，それを系統関係に基づいた米倉 (2013) の分類体系に従って配列した目録である．さらに，伊藤浩司・日野間彰 1985『北海道高等植物目録 I』ほか，北海道の植物相に関わるいくつかの主要文献についてはページ番号も引用され，国と道のレッドリストに掲載された植物についてはランクも示されている．学名は基本的に米倉 (2012) に従っているが，一部の分類群についてはその後の研究成果や著者の見解に従って改訂されている．また，上記の主要文献から品種ランクを中心に米倉 (2012) にない多くの分類群が採録されているが，命名者などの取り扱いにおいて不統一な点が目立つのが気になる所である．編者の松井洋氏は，永年にわたり釧路地方を拠点に北海道の植物を研究されており，本誌にもカラフトモメンヅルに関する論文が掲載されている（松井 洋・林 廣志 1995，本誌 **70**: 264–297）．近年は『北方山草』に北海道産植物の和名に関する寄稿をされている．

広大な北海道に生育する植物を一覧できる著作としてはコンパクトにまとめられていて便利であるが，問題もある．編者の扱った「北海道」に北方領土を含むかどうかについてはあいまいな所があり，巻末の地図（図4, 5）には北方領土も含まれているが，本文を見ると南千島の固有種には採録されていないものが多く，チシマウスユキソウのように採録されているものはわずかである．北方領土を含んだ千島列島の植物に関しては，監修者の高橋英樹氏が同年に「千島列島の植物」を出版された（大橋広好氏によって本誌 **90**: 225–226 に紹介されている）ので，それとの参照が欠かせない．

なお，本書の解説の冒頭には「APG分類体系 (2009) に基づく北海道維管束植物の分類目録である」と書かれており，また英文タイトルにも「arranged in the order of Angiosperm Phylogeny Group (APGIII)」と書かれているが，APG分類体系がカバーしているのは被子植物のみであるので，維管束植物全体を扱っている本書の内容とは整合していない．このような不整合は，系統関係に基づく分類体系を採用している日本の近年の出版物（本書 p. 5 の「APG関係の参考文献」にまとめられている）ではしばしば見られるので，系統関係に基づいた分類 = APG というわけではないことに注意しなければならない．ちなみに，被子植物そのものについても，米倉 (2013) の体系はAPGIIIに若干の改変を加えてあり，本書でも採用されているサギゴケ科はAPGIIIにはない．

入手方法は松井洋氏（〒064-0807 札幌市中央区南7条西9丁目1030-4-401 E-mail: matsui-h18@jcom.home.ne.jp）宛に直接申し込まれたい． （米倉浩司 K. YONEKURA）

□南 敦：**ふるさとの花 四季の花・進化のドラマを追う** A4版．2014．￥2,800＋税．私家版．No ISBN number.

著者の南 敦氏は永年にわたって山口県のフロラ研究を行ってきた方で，同県の代表的な植物誌である『山口県植物誌』（岡 国夫，眞崎 博，勝本 謙，見明長門，三宅貞敏［編］ 1972）に，氏自身が採集された数多くの標本が引用され（多くが国立科学博物館に収蔵されている），現在では山口植物学会の会長を努められている．

本書は，朝日新聞山口県内版に2009–2014年の5年間に渡って毎週連載されたコラムの集成である．1週のみ新聞社の都合で休載されたというが，5年間の長きにわたって継続して執筆されたことに，先ず敬意を表したい．

本書で取り上げられている植物は，希少種，天然記念物, 名木, 固有種, 薬草などの266種であり，これは山口県の野生植物約2700種のうちの約10％に当たるという．「進化のドラマを追う」と表題の副タイトルにあるように，取り上げられた各種の解説に著者独自の考えが述べられ，興味深い．連絡先は次のとおり．南 敦氏 743-0013 山口県光市中央 6-21-16 Tel & Fax: 0833-71-3235.

（門田裕一 Y. KADOTA）

□川尻秀樹：**「読む」植物図鑑** B5. 344 pp. 2007. 全国林業改良普及協会．￥2,000＋税．

ISBN 978-4-88138-180-9.

図鑑と言っても，葉や花の図や写真から，植物名を調べるためのものではない．利用という面を主体にして，人と自然とのつきあい方（「触れあい」という単語が流行しているが，なにか軽い感じがして，使いたくない）の色々を紹介する．森の樹木（52 件），山野草（21 件），森の生き物（10 件），きのこ（7 件），森の技術（12 件）の 5 章があるが，いずれも従来の類書よりも，人間との関係を詳しく語って，残そうという意図が感ぜられる．森の技術の章は，廃れかけている山仕事の実際を，一般向けの記録に留めようとの意図が感じられる．続編もすでに刊行されているとのことである．

（金井弘夫 H. Kanai）

□アラン・セール（作），ザウ（絵），松島京子（訳）：**イチョウの大冒険，世界でいちばん古い木** 26 × 26 cm. 45 pp. 2012. 冨山房インターナショナル. ￥1,800 + 税．ISBN 978-4-905194-47-7.

原本は “Alain Serres & Zau (Illust.): Le Ginkgo, le plus vieil arbre du monde”

ただ眺めただけでは絵本に過ぎない本書は，どういう読者を対象にしているのだろうか．ハードカバー，見開き 2 頁の紙芝居のような画面で，子供向けのように見えるけれど，内容はとてもそんなものではない．大人が読んでも，たやすく理解できる人は少ないだろう．地球上の生命創成から始まり，恐竜の時代と共にイチョウが現れ，その後の地表の大変動で恐竜は絶滅したけれど，イチョウは中国奥地で生き残り（このあたりから景色が中国風になる），中国の薬種商の仕事場が描かれて薬効や伝説の紹介があったかと思うと（ここ迄たった 7 画面），突然，ケンペルの来日でイチョウがヨーロッパに紹介され，丈夫な性質と挿し木や種子による繁殖がし易いために，各地に拡まったことや，広島の原爆でも生き残ったことが記されているけれど，精子発見の話しは出て来ない．ここに示された日本全図は，当時の国内 68 ケ国を示し，福禄寿，恵比寿，大黒のユーモラスな肖像だの，仏教宗派による数珠の形の違いだのが示されていて，面白い．最後の 2 画面には，‘ いわさきちひろ ’ 流の女の子が盆栽をいじっていたり，蕪村の俳句の紹介があったりする．幼稚園で読み聞かせるには，レベルが高すぎると思う．イチョウのはなしよりは，自然誌や文化史のはなしに，引きずり込まれないわけにはゆかないからだ．大人が読むのなら尚更で，表面的に読んだ（見た）だけでは，得るところは少ないだろう．

最後に「非凡な木」と題する解説があり，内容は本文の続きみたいなものだが，使われた写真や図版の権利所有者が不明なので，知らせて欲しいと書いてある．その中には「仙台のイチョウ」,「オレゴン州の化石」,「長崎出島の絵図」,「ケンペルの旅姿」などがある．異人屋敷の二階の窓が，引き戸や開き戸ではなく，蔀戸とは知らなかった，日本の近世博物史に詳しい人なら，すぐにでも出典が分かりそうなものもある．不思議な本である．

（金井弘夫 H. Kanai）

□谷津直秀（山田真弓・編）：**欧州生物紀行** A5. 511 pp. 2011. 中山学術振興財団（中山書店）. ￥4,500 + 税．ISBN978-4-521-73371-5.

著者 (1877–1947) は著名な動物学者．1931 年に学術調査のため，欧米諸国を歴訪．1935 年 ポルトガルのリスボンで開かれた世界動物学会議に，日本代表として参加．まだ航空機による旅行は一般的でなく，船でインド洋を横断，スエズ運河経由で地中海に入るというコースである．そして欧州と言っても，イタリア，モナコ，南フランス，スペイン，ポルトガルの範囲で，今日我々が認識しているヨーロッパとは少々ズレがある．これらの体験に基づく旅行記なのだが，一人称は用いず，感傷もなく，歴史や用語に詳しく，まるで旅行案内のような書き方である．都市間の距離や汽車賃や到達時間，物の寸法まで，几帳面に記してあるが，日付は全くない．きっと，まだたやすくは大旅行ができない時代に，後に続く人たちのために，毎日メモをとり，資料を集め，帰国後も時間を惜しんで整理されたのだろう．

特に，「パレスチナを旅して」の章は，著者がキリスト教徒だったこともあって詳細をきわめ，現在のイスラエルに相当する地域を丹念に描写しているうえ，付録としてパレスチナの地質，動物，植物についての詳しい記述がある．

前編は 1943 年に三省堂から刊行され，引き続き後編の刊行も試みられたが，大東亜戦争末期の混乱で出版のチャンスがなく，著者は 1947 年死去．遺稿は遺族に返却され，時がたつにつれて消息が絶えてしまった．編者は丹念に遺稿の探索を行い，東京や北海道在住の「谷津」姓の人に一々

電話をかけるなど，手を尽くした挙句，2008年になって遺族の手元に原稿が保管されていることが判明，このたび前・後編をまとめて刊行の運びとなったものである．先輩の貴重な記録を発掘された編者および協力者の努力を多としたい．

（金井弘夫 H. KANAI）

□岩槻邦男：**生命（いのち）のつながりをたずねる旅** B5. 343 pp. 2012. ミネルヴァ書房「自伝」シリーズ．￥3,000＋税．ISBN 978-4-623-06172-3.

この出版社が「自伝」にこだわって著者を選んだものだろうから，政治家や芸能人のそれとは異質のものだろう．これ迄に10名の方のものが出版されており，生物学では毛利秀雄氏が入っている．生い立ちから学生時代を経て，研究現場や学界での様々な場面や役割をこなして行く様が，淡々と語られる．同年輩の私には心当たりのある場面ばかりで，「俺もこんな風にこなせたらよかったのに ...」と思うが，後の祭である．私生活については「ベターハーフ」という単語があるだけで，すべてを語っている．（金井弘夫 H. KANAI）

□稲垣栄洋，三上 修（画）：**身近な雑草の愉快な生きかた** A6. 259 pp. 2011. 筑摩書房（ちくま文庫）．￥700＋税．ISBN 978-4-480-42819-6.

50種類の雑草の生きざまを，分かり易い言葉で説明し，その生活環境への反応ぶりと種の未来を，適応戦略の面から考察してみせる．スズメノテッポウには自家受粉型と他花受粉型の2つのタイプがあり，それにともなって発生時期の異なる水田型と畑地型に分かれているが，水田型は栽培技術の進化に伴う刈り入れ時期の変化に対応できず，ライフサイクルを全うできなくなってきた．この型は自家受粉で，子孫の形質変異の幅が狭いために，これに対応する子孫を残すことができず，苦境に陥っている ... という．たとえ教科書にこういうことが書いてあっても，教科書には大事なことばかりがズラズラと書いてあるので，スズメノテッポウの御家騒動が頭に残る確率はごく低いだろう．目次には「ヘクソカズラ --- やむにやまれぬ乙女の選択」のように，観光地の茶屋の呼び込みのような惹句がいちいちついているので，読者は引っかかったところへ入ればよい．どこへ入っても，観察会指導用のトピックを身につけることができる．

三上 修氏の写実的な図が，すべての植物に（ときには2点）ついているが，私は文庫本を手にしてしまったので，「図が小さい」と文句は言えない．なお原典は，2003年に草思社から刊行されたものである．（金井弘夫 H. KANAI）

□渡辺一夫：**イタヤカエデはなぜ自ら幹を枯らすのか** B5. 251 pp. 2009. 築地書館．￥2,000＋税．ISBN 978-4-8057-1393-7.

観察会をやって，葉なり花なりに出会うと，まず「コレは○○です」と，その名前を告げる．それから，その種の特徴だの近似種との区別点だのを言う．ただ，これだけでは，誰がやっても同じだろうから，自分なりの特色を出さねばならない．そこで普段から，いろんな知識を仕込んでおいて，披露する．そのネタは，生理，生態，形態など他分野のトピックから拾っておくのだが，万葉集だの諺だの，理系でないものもわざわざ用意しておく．ところが思いは同じ人がいて，たまには「アッ，俺と同じネタだ!」と，思うこともある．本書は暖温帯（常緑樹），暖温帯（落葉樹），中間温帯・冷温帯，亜高山帯・高山帯と分けて，そこに見られる主要な樹種合計36種類の適応戦略が語られている．たとえばブナは，雪の多い裏日本では純林を作り，表日本ではミズナラと混ざる．一方イヌブナは表日本に多いが種子による繁殖はうまく行っていない．その代わりに株立ちになりやすく，それが種子による繁殖に取って代わっている．サワグルミの群生は土石流の跡地と思え ... という具合で，森林でよく見られる種類について，語るべき話題をたくさん提供してくれる．各トピックはいずれも6–8頁にまとめられて読みやすく，豊富な話題を提供してくれる．

（金井弘夫 H. KANAI）